

一 自己を知るは自己を修むる也

人生問題と云はず、社會問題と云はず、宗教問題と云はず、自己といふ事を離れては、何事も無意味に終つて了ふ。經典を研究する、傳記を研究する、師匠に就く、孰れにしても、自己の修道と云ふことが土臺でなくてはならぬ。自己修道の第一歩は自己省察である。自己とは何ぞや。自分とは云何な者であるかを、省察して見るのが入道の第一歩である。第一歩と云ふよりも、寧ろその中心である。終局である。希臘のデルフォイの神殿の入口には「汝自身を知れ」と書いてある。横川の源信僧都は「夜もすがら佛の道を求めつゝ己が心に尋ね入りぬる」と詠ぜられた。道は邇にあり。佛法は脚跟下なり。衆生近きを知らずして、遠きを求むる愚さよと云つた有様。禁内底に達する大道も、近く墻外底の小路よりせねばならぬ。遠い他國に旅するには、先づ自分の家の軒下から足を運んで行く。佛になる道も遠い高い處にあるのではなくて、近く低く我が心の中にあるのである。

自己を省察せよ。自己を見究めよ。自己を發見せよ、自己に徹底せよ。自己とは如何なるものなるかを究明せよ。古聖は全力を注いでこれが研究に盡された。釋尊が王宮を出で、修行せられたのも、自己を明かにする爲であつた。傳教大師が一卷の『法華經』を懷にして四明ヶ岳に籠られたのも、自己を明かにする爲であつた。法然上人が黒谷の報恩藏に大藏經を五遍まで繰返して御覽になつたのも、自己を明かにする爲であつた。親鸞聖人が二十年かゝつて道を求められたのも、矢張り自己を明かにする爲であつた。弘法大師の入唐も、道元禪師の渡宋も、要するにこの自己とは何ぞやの問題を、解決する爲に外ならない。

昔、嵩山の少林寺に黙坐して居る達磨大師の許へ、雪中に起つて臂を打斬

りつゝも、熱心ねっしんに道みちを求めた慧可えかに對たいし、大師だいしは最初さいしよに「汝なんぢの心こころを持つて來こ
い」と申まをされた。私共わたくしどもは教をしへの前に此心このこころを持つて行くべく、先まづ私わたくしの心こころを
見付みけ出ださねばならぬ。